

# History of Soil Science and Pedologists

Masanori OKAZAKI

Graduate School of Bio-Application and Systems Engineering  
Tokyo university of Agriculture and Technology

## 土壌学の歴史とペドロジスト

岡崎正規

東京農工大学大学院生物システム応用科学府  
〒184-8588 東京都小金井市中町2-24-16

サゴヤシは、自らの命を預ける土壌を簡単には選べない。人がサッカーをもぎ取り、適切な土地に移植すれば、サッカーは一人前のサゴヤシに成長する（山本 1998；サゴヤシ学会 2010）。サゴヤシの栄養分は水と土壌からやってくる。サゴヤシがその一生を託す熱帯の土壌が、歴史的に誰によって、どのように明らかにされてきたかを知る人は多くない。

永い土壌学の歴史の中で、熱帯の土壌が一人前の個性的な人格を持つことが周知されるようになったのは、オランダにとっての黄金の17世紀（司馬 1991；西村 1994；松方 2010；大久保 2010）以来である。オランダが、熱帯に展開したプランテーション（ムルタトゥーリ 2003）を維持・拡大するための基礎知識を土壌学に求めたからである。Mohr E. C. J.は、1944年に*The Soils of Equatorial Regions with Special Reference to the Netherlands East Indies* (translated by R. L. Pendleton)をEdwards Ann Arborから出版した（久馬 2001）。この本は、Mohrが1938年にオランダ語で記した「熱帯地域の土壌 とくにオランダ領東インドの土壌について」を英語に翻訳したものである。次いで、Mohr E. C. J.とvan Baren F. A.は1954年に*Tropical Soils*をMoutonより出版した。さらに、Mohr E. C. J., van Baren F. A.およびvan Schuylenborgh J.は1972年に*Tropical Soils*をMouton-Ichtiar Baru-van Hoeveから出

版した。これらの熱帯土壌の研究と記述は、熱帯に注目している人々に答えるに十分な情報を多くのデータとともに与えた。一方、ドイツ・ハンブルグ大学教授であったVagelerは「熱帯および亜熱帯諸国の土壌研究の基礎」（1930）を著し、スーダン、エジプト、インドネシアの研究を公表した。また、Buringh P.は1968年から1979年に、熱帯・亜熱帯地域の土壌研究を*Introduction to the Study of Soils in Tropical and Subtropical Regions*と題して第1版から第3版をCenter for Agricultural Publishing and Documentation, Wageningen (PUDOC)より出版（菅原道太郎・尾中健二郎が和文に翻訳し、熱帯土壌学提要および続熱帯土壌学提要として、日本イリゲーションクラブより出版）した。1976年にSanchez P. A.は*Properties and Management of Soils in the Tropics*をJohn Wiley & Sonsから出版し、熱帯土壌の肥沃度の性質と管理について明らかにした。

また、1992年にvan Wambeke A.は*Soils of the Tropics, Properties and Appraisal*をMcGraw-Hillより出版し、熱帯土壌の生成と分類を記述した。サゴヤシの生育する東南アジアの低湿地に分布する土壌に関しては、Andriessse J. P.が1972年に泥炭土壌を中心として*The Soils of West Sarawak*をSarawak Government Printing Officeから出版した。さらにDriessen P. M.は1978年に*Peat Soils and Rice* (International Rice Research Institute

出版)の中の一章として著た。van Breemen N.は博士論文を取りまとめて1976年にGenesis and Solution Chemistry of Acid Sulfate Soils in ThailandとしてPUDOCより出版し、タイにおける酸性硫塩土壌について詳述している。また、久馬一剛は1986年に東南アジアの低湿地の中の一章として東南アジア低湿地の土壌(酸性硫塩土壌, 熱帯泥炭土壌)(久馬1986)を記述している。

人類が土壌と未長く付き合っていたためには、土壌とはなんであるかを、まず第一に理解しなければならないであろう(片岡2010)。「人は土をどうとらえてきたか 土壌学の歴史とペドロジスト群像」(永塚鎮男訳)(図1)は、Histoire des PEDOLOGUES et de la SCIENCE DES SOLS (Jean BOULAINE 著)の全訳本である。著者のジャン・ブレーヌは、パリ(国立)農学研究所教授を務め、フランスの土壌および土壌学の著書を執筆している土壌学研究者である。訳者は、なぜHistoire des PEDOLOGUES et de la SCIENCE DES SOLSを全訳したかの理由を「訳者あとがき」に「その内容が・・・人類の土壌に対する知識がどのように進歩・発展してきたか、その歴史を社会が経済的な背景と関連づけて述べている・・・」と記している。本書は、人が土壌を知ることの重要性を提示した著書としてユニークな光を放っている。本書(訳本)の推薦者である熊沢喜久雄のことは直接引用すれば、読者は「本書をひもとき、先人の業績とその歴史的業績・発展過程を知り、土壌とその人間活動における重要な役割についての知識を獲得すると、自然環境を形成し、それを維持するものとしての土壌を「いきているもの」として持続可能にするように働きかけることの重要性を知ることになる。」であろう。

本書は、サゴヤシに係る研究者の土壌を理解することへの一助となると考えられ、一読をすることをお薦めする。



図1 ジャン・ブレーヌ (Jean BOULAINE) 著, 永塚鎮男訳 人は土をどうとらえてきたか 土壌学の歴史とペドロジスト群像, A5版, 415ページ, 2011年3月31日発行, 農文協

## 引用文献

- 片岡夏実訳 2010 土の文明史, デイビッド・モン トゴメリー David R. Montgomery 著, Dirt: The Erosion of Civilizations. 築地書館(東京) pp. 338.
- 久馬一剛 1986 東南アジア低湿地の土壌, 農林水産省熱帯農業研究センター編, 東南アジアの低湿地. 農林統計協会(東京) p. 41-103.
- 久馬一剛 2001 熱帯土壌学. 名古屋大学出版会(名古屋) p. 2-12.
- 松方冬子 2010 オランダ風説書(ふうせつがき), 中公新書2047. 中央公論新社(東京) pp. 216.
- 西村六郎訳 1994 モーリス・ブロール Maurice Braure 著, オランダ史 Histoire des Pays-Bas, 文庫クセジュ752. 白水社(東京) pp. 143.
- ムルタトゥーリ(本名ダウエス・デッケル) 2003 マックス・ハーフェラール(Max Havelaar) もしくはオランダ商売会社のコーヒー競売, 佐藤弘幸訳. めこん(東京) pp. 538.
- 大久保健晴 2010 近代日本の政治構想とオランダ. 東京大学出版会(東京) pp. 403.
- サゴヤシ学会編 2010 サゴヤシ. 京都大学学術出版会(京都) pp. 390.
- 司馬遼太郎 1991 オランダ紀行, 街道をゆく35. 朝日新聞社(東京) pp. 497.
- 菅原道太郎・尾中健二郎訳 1974 ピーター・ブーリング Pieter Buringh 著, 熱帯土壌学, 提要(Introduction to the Study of Soils in Tropical and Subtropical Regions). 日本イリゲーションクラブ(東京) pp. 131.
- 菅原道太郎・尾中健二郎訳 1981 ピーター・ブーリング Pieter Buringh 著, 熱帯土壌学, 提要(Introduction to the Study of Soils in Tropical and Subtropical Regions). 日本イリゲーションクラブ(東京) pp. 181.
- 山本由徳 1998 サゴヤシ, 熱帯農業シリーズ, 熱帯作物要覧No. 25, 国際農林業協力協会(東京) pp. 109.